

舌

也、今俗呼彌。重齒。

〔倭名類聚抄鼻三〕舌 四聲字苑云、舌音切、之〇多〇

〔箋注倭名類聚抄鼻二〕此有缺文、說文舌在口所以言也、別味者也、釋名舌泄也、舒泄所當言也、

〔伊呂波字類抄人體〕舌シタ

〔身體和名集之〕シタノサキ 舌尖 シタノチ 舌本

〔倭訓栞前編十一〕舌をいふ、舌なふ義にや、なとたと同韻通せり、三寸舌といふは漢書に見

えたり、笙、箏、篳篥の舌は簧をよめり、禮の集説に、簧は笙の舌と見えたり、下をよむは舌たるの略なるべし、歌に舌たのおもひ舌たのなげきなどいふは、心をさしていへり、小舌は重舌の病なり、又子舌といへり、

〔天台南山無動寺建立和尚傳〕仍抑留寺家解文僧、忽以鎮操補任彼院十禪師、驚感鳴舌、叩頭山々僧侶、皆稱希有、同觀。四年登金峯山、三箇年安居、湛譽院主同登、各占東西之岫、聊構草庵、遞送使者、試其呪驗、湛譽使者到於和尚庵、付香火、和尚使者到於湛譽之庵、付香火、互各相使、日々如此、朗善大德與和尚共同行、夜出於庵、未幾有大叫喚之聲、和尚走出見之、朗善橫喫出舌、覺地將死、和尚大驚、揮劍加持三時許、纔以蘇生、漸々蘇息語、爲鬼被打、已入死門、若非和尚加持之助、豈得再生之便哉、其後朗善彌伏從、

〔今昔物語十三〕一叡持經者聞死骸讀誦音語第十一

今昔一叡ト云フ持經者有ケリ、幼ノ時ヨリ法花經ヲ受ケ持テ、日夜ニ讀誦シテ年久ク成ニケリ、而ル間一叡志ヲ運テ熊野ニ詣テケルニ、穴ノ背山ト云フ所ニ宿シヌ、夜ニ至テ法花經ヲ讀誦スル音髣ニ聞ユ、其音貴キ事无限シ、若シ人ノ亦宿セルカト思テ、終夜此レヲ聞ク、曉ニ至テ一部ヲ誦シ畢ツ、嗟テ後其ノ邊ヲ見ルニ宿セル人无シ、只屍骸ノミ有リ、近寄テ此レヲ見レバ、骨皆烈テ